

## 八郎湖流域管理研究 第5号の発刊にあたって

八郎湖流域管理研究第5号の発刊に当たり、巻頭の言を述べさせていただきます。

八郎湖は平成19年12月に全国11番目の指定湖沼となりました。八郎湖を取り巻く流域では、八郎湖の水質改善を目指して水田の水管理や下水道処理など幅広い分野での取組が展開されています。今後も、水質改善の取組を地道に継続することが重要です。

水質の富栄養化によって発生するアオコは、シアノバクテリアと呼ばれる藍藻類が大量に増殖した現象です。シアノバクテリアが地球上に登場したのは、約35億年前と予想されています。その後、藍藻類が光合成により酸素を作るようになると、大気中の酸素量が増え紫外線的作用によりオゾン層が形成されました。陸上で生物が生活するために大きな障害であった紫外線の影響をオゾン層が軽減したことにより生物は地上で生活できるようになったといわれています。実に長い壮大なドラマがありますが、水質改善に向けては、このアオコを形成するシアノバクテリアの生態をしっかりと理解しながら対策に結びつける必要があります。

秋田県立大学を中心とした研究分野においては、アオコなど八郎湖の生物を対象にした基礎的研究、水質改善に向けた実践的研究を進めています。八郎湖の水質問題の解決には、基礎的研究と実践的研究の両立が不可欠です。本誌は、地域住民、行政・NPO関係者、研究者の八郎湖流域の現状や問題点に関する正確な認識共有と共通視点の育成への貢献を目的に発刊されました。

今回の第5号では、「八郎湖の汚濁負荷の実態と水質改善の取り組み」と題して研究報告3題を掲載しました。1つめは、アオコをエサとしても利用する二枚貝イシガイと生息環境の相互関係についての基礎的な研究成果です。2つめは、八郎湖への海水導入の効果と課題について、そのメリットとデメリットを整理しています。3つめは、環境学習を受講した中学生・高校生へのアンケート調査の結果から八郎湖流域における環境学習の到達点と課題についての報告です。いずれも、研究者が八郎湖やその流域で行った研究や教育現場から得た結果をもとに取りまとめたものです。

今回掲載した報告が、多くの方々の目にとまり、八郎湖の「水」とその水を利用しながら流域で暮らす人びとが作る「自然と共存する地域」の活性化に繋がる一助となりましたら誠に幸いです。

秋田県立大学生物資源科学部

金田 吉弘